

LIFE



今井 良朗 (いまい・よしろう)

1946年大阪府生まれ 武蔵野美術大学卒業
武蔵野美術大学芸術文化学科教授

1976年から武蔵野美術大学美術資料図書館の
ポスターコレクション、絵本コレクションの収集
と体系化に従事。

1994年～2000年同美術資料図書館副館長。
専門は、ポスターや絵本などのグラフィック表
現を対象にした視覚表現論、日本近代デザイン
史、ヴィジュアル・コミュニケーション・デザイン。
1997年絵本学会の設立に参加、以後絵本の表
現研究とともに講座やワークショップを通じて
絵本の魅力を伝える。絵本学会理事・事務局長、
日本記号学会会員。

展覧会企画：「絵本の視線と空間展」「ポーラ
ンド・アート・ポスター展—伝統と革新の半世紀—」
「コンサード・シアター・ジャパン—現代日本
演劇のグラフィック・デザイン1960—1980」ほか。
著書に『絵本の視覚表現—そのひろがりとはた
らき』（共著）（日本エディタースクール出版部）
ほかがある。

*1 オホーツク・アートセミナー

芸術活動を通じてまちの活性化をはかるこ
とを目的に1985年にスタート。音楽部門と美
術部門に分れ、美術部門は、91年から描画講座
のほかにデザイン講座が加わった。アートセ
ミナー実行委員会が主催し、美術館や教育委員
会、社会教育団体が協力してきた。昨年より民間
の主導による運営に変わった。当初から本学の
教員がかかわり、この10年は、両講座とも本学
の教員が担当してきた。

社会と美術・デザインを結ぶ

芸術文化学科 今井 良朗 教授

●誰のための美術・デザイン

今年の2月、入学試験の始まる直前に「オホーツク・アートセミナー」¹⁾のために網走に出かけた。このセミナーは、毎年絵画講座とデザイン講座が行われ、もう20年近く続いている。私がデザイン講座の講師として最初に網走を訪れたのが1998年の夏、それ以来毎年講座を担当してきた。このセミナーは、当初社会教育団体や網走市教育委員会が中心になって運営されてきたが、一昨年新しく完成した文化交流センター「エコーセンター」で開催することになったのを機に、住民主導で運営されるようになった。

それにしても参加者のものづくりに対する情熱と向上心にはいつも驚かされる。参加者は、10代から70代までとはばひろいが、とりわけ4、50代の主婦がいつも熱心に取り組んでいる。聞いてみると、普段から趣味で絵を描いたり陶芸にいそんでいる人が多い。そして、このセミナーで新しい発見をし創造力を高めるきっかけにするのだという。

1日目の講座では、表面が加工され色の着いた特殊紙40枚を切り抜いて絵本をつくってもらった。でき上がったものは、こちらの予想をはるかに超えた素晴らしいものばかりだった。この驚きと感動は、毎年変わることはない。正直言って、はじめてこの講座を引き受けたとき、一般的なカルチャー・スクール以上のものは期待していなかった。

ではなぜここでつくられる作品に感動するのか、回を重ねるごとに確信したことは、ほとんどの人たちのテーマがいつも身の回りのこと、オホーツクの自然や北海道の文化を取り上げていたことだ。それも心から自分の町やまわりの自然に愛着を持っていることが伝わってくる。対象に向けられる思い入れや自分の中で感じている情景を何とかうまく表わしたいという強い気持ちが、そのまま作品に表れるのだろう。それが見るものに強い感動を与える。

東京にいれば、ありとあらゆる芸術・文化に触れることができるが、限られた文化施設しかない網走ではそうはいかない。しかし、かえてそのために地域の文化も守られてきたのかも知れない。また、限られた機会だからこそ直接芸術・文化に触れたいという気持ちも一層強いのかも知れない。決して大きくない網走市立美術館は、市民によく利用されている。情報収集や情報交換の場になっている。

ただ一方で、芸術・文化に関心が高いのは一部の人たちで、セミナーに参加する人たちは積極的な芸術や文化の愛好者であることには違いない。しかし、それでも活発な活動と人の輪があることは特筆すべきことなのだと思う。



絵具で染めたティッシュペーパーを素材に四季を表現、制作途中に集まり相互に評価したり、技法を交換しあう。(2001年2月・網走)

このような現実も、もちろん網走の地域的な特性もあるかもしれないが、どうもそれだけではない。日常的につなぎ役を担っている人たちがいるのだ。網走市立美術館学芸員の献身的な活動と努力によって支えられているところが多分にあるし、市民で構成されているアートセミナー実行委員会や教育委員会の役割も大きい。網走市立美術館では、定期的に市民のために教室も開いている。その学芸員は、市民との対話から中学生や高校生の相談まで引き受け、時には、美大受験のための実技指導も行ったりしている。また最近では、アートセミナー受講者の有志が、自分たちの学んだものを子どもたちに伝えるための集まりをつくっているという。

地域における芸術・文化活動は、こうした住民の情熱によって支えられている。とりわけつなぎ手となる存在がいかに重要かがよくわかる。ある意味では、首都圏に住む人たちに以上に生活の一部として芸術・文化を享受していると言えるかもしれない。

マスメディアの影響によって、私たちは、文化は消費するもの、単なる文化の消費者として慣れ親しんできたきらいがある。しかし、人は文化の消費者としてだけでなく、本来文化の生産にも深くかかわっている。もともと文化は生活の様式そのものであり、階層や職域を超えて日常生活と深くかかわってきた。個から集団へ、集団から地域社会へとひろがっていく過程でその形を明確にしていく。芸術もこうした文化を形成していく延長の中にあると見ることができる。かつて、それぞれの地域に固有の文化・芸術がしっかりと根を張っていたのは、人々の日常の営み、生産と密接に結びついていたからにほかならない。

網走でセミナーの受講生と話していると、美術やデザインが誰のためにあるのかということをもつて考えさせられる。美術・デザインの専門家がいて一方で、

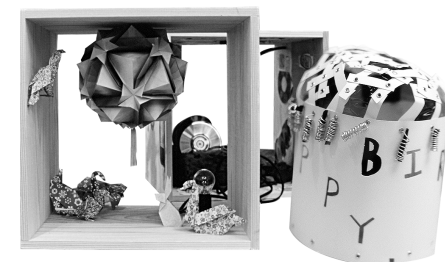


染めた色紙は、さまざまな形に切られ、ジャバラ折りの台紙に構成して完成。最後に一人ずつ発表しみんなで感想を述べあう。

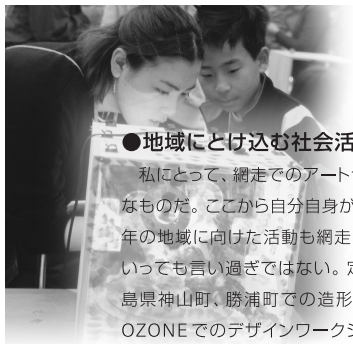
受容する側が存在し、また、専門家を志す人たち、趣味で絵を描いたりものをつくる人たち、生活の中で楽しむ人たちがいる。表現する側が一方向的に提示し、受け入れる側はただ消費するだけというそんな関係でよいのだろうかと思う。

確かに1980年代以降、受容する側の視点を重視したり、受容者への身体的なかかわりに関心を向ける作家が増えてきたことも事実だし、各地に展開されはじめたアーティスト・イン・レジデンスを活用し、地域の住民と交流を図る作家も多くなった。それでも、一般的には美術・デザインは、特別のものという意識がまだまだ強い。ましてや絵を描く、デザインするということがなればなおさらである。

美術、デザインを特別なものという認識から、私たちの生活に欠かせないものという認識にたつたとき、人はそれぞれのかかわり方、美術・デザインへの関心があっても本当はいはずである。人はもともと生まれながらに創造していく意識、意欲を持っている。日常生活も決まりきった形式の中で型通りに営まれているわけではない。人はそれぞれ工夫しながら生活のスタイルや身の回りの空間をつくってきたし、仕事の中にも、家庭の中にも、そして遊びの中にも取り入れてきたはずだ。



古い玩具、写真など身近なものを集めて、木枠の中に自分だけの世界を作
る。教室のロッカーに今も収められている。(2000年3月・徳島)



●地域にとけ込む社会活動の意義

私にとって、網走でのアートセミナーはとても刺激的なものだ。ここから自分自身が学ぶことも多い。ここ数年の地域に向けた活動も網走を契機にして始まったといっても言い過ぎではない。定期的に行なっている徳島県神山町、勝浦町での造形ワークショップ²や新宿OZONEでのデザインワークショップ³、それに絵本に関連した講演やワークショップ⁴も積極的に日程に入れるようにしてきた。芸術・文化を日常的な視点からとらえていくためには、自分自身がいかにか社会や生活と密接にかかわれるかということ、それと芸術と社会、地域と人、人と文化、これらの関係を取り結ぶことの重要性を痛感しているからである。

生活者の立場から芸術を思考し、芸術を社会生活の中に根づかせることを目指すのは、私が所属している芸術文化学科の基本的な考え方もある。この学科では、学内での授業カリキュラムとならんで、学外での実践的なフィールド・ワークのプログラムを重要なものとして位置づけている。専門領域を深めると同時に、社会に対するはばひろい視点を培うことを目的としているからだ。もう3年目になる徳島県での造形ワークショップを実現させ、推進してきたのもそのためである。

このワークショップは、大学と地域が連携し、教員や学生と地域住民が一体となって実施するかなり大掛かりなものだ。ただ、徳島県で行われる造形ワークショップは、網走のアートセミナーとは、目的性も違う。網走の参加者は、すでに学習要求の強い芸術に対する魅力を少しでも知っている人たちである。セミナーは、さらに新しい美術やデザインと出会い、価値に触れてもらい、自らを高め地域の文化的交流を広げていくための場になる。それに対して徳島県でのワークショップは、過疎化する中山間地域に町外の人との交流をつくり、地域に新たな文化の根を張り、町を活性化させようとの地元のねらいがまずある。

もっとも、私たちにできることは、造形行為を通して多くの人たちとの交流をつくり出すことであり、“地域の活性化”“地域文化の創造”は、結果としてそうあればいいという理想の形、理想の目標である。対象も子どもが中心であり、子どもたちには、つくることの喜びや芸術の魅力を知ってもらい、楽しんでもらうことに主眼を置き、芸術との接点がありませんでした地元の人々には、身近なものとして芸術の魅力を知ってもらうことである。これまでに、大きな絵本づくり、光と影の造形、立体探検地図づくりなどを夏と春に学生が主体になって実施してきた。

自分自身と向き合うことができる造形行為は、地域活動の手がかりとしては理解されやすい。誰もが潜在的に持っている創造に対する意識を引きだし、ものをつくり出す行為を通して場を共有しようというのが、このワークショップのねらいである。

この3年、地域と深くかかわることで、住民との交流も生まれた。私たちはもちろん地元の人たちにとっても地域の文化や日常性を見なおす契機になったはずである。特に学生たちにとっては、学ぶことは多かったはずだ。地元の人たちとの出会いや参加者との出会いは、自分自身を見つめることや潜在能力を引きだす契機になっただろう。最初は、芸術なんて無縁で解らないと言っていた地元実行委員会の人たちも、ものをつくることは自然な行為であり、普段の生活の中にもある行為なのだということを自ら口にするようになった。当初半信半疑だった実行委員会の人たちや地元の人たちも、何回かのワークショップを経て自分たちの生活の一部として定着していることを実感したはずである。

結果的に徳島県での活動は、地域内にワークショップを通じた協力関係と地域コミュニケーションをつくり上げていった。網走とはまた違った形で、交流のひろがりや文化を創り出していく場が生まれたように思う。もちろん、すべてがうまくいっているわけではない。地元の

関係者、教員、学生、それぞれこのワークショップに見いだそうとする意義も、向けるまなざしも必ずしも同じではない。造形活動に対する思いも多様だ。しかし、それはそれで構わないと思っている。ワークショップに対する定義自体固定されたものではないし、さまざまな手法があっていいからだ。

ただ、私が徳島で行おうとしている造形ワークショップは、参加者に技術や技能を教えることだとは思っていない。もちろん、ただ楽しさや素晴らしさを伝えればよいというものではない。ワークショップは、何事かを伝えるための手段ではなく、参加者が身体的に何事かを体験し自ら学ぶ場として位置づけられる。日常生活の中では経験できないことを意識的に設定して、特別の経験をしていくことが、日常のことばのやり取りと違ったコミュニケーションの回路をつくり出してくれる。物事の間接を理解すること、人との関係、社会性を理解しようとしなければ、その場からたちまち取り残されてしまうか逃げ出さざるを得ない。能動的にかかわっていかねば否応なしに意識も変わるし、お互いに成長を助長する。それぞれがワークショップを通して、集団の中の自己表現と自己の確認、ものをつくりだしていく喜び、共同作業の意義を体験する。ワークショップはそんな場なのだ。

したがって、その時の完成度を高めるために準備段階から答えをあらかじめ用意したり、主催する側の意図通りに事を進めても意味がない。ここでは、つくられるものの完成度や出来栄が問題なのではない。その場で展開されるプロセスこそ最も大切にしなければならぬものである。感じることの大切さ、発見することの大切さを造形行為を通じて知ってもらおう。好奇心は新たな探求心を生み出す、最初は小さな点でも少しずつ広がり大きくなっていく、一つのことばにこだわらない組み合わせ、発展性こそ創造力を導き出す造形ワークショップの大きな特徴だろう。主催する側も参加者も、受け身ではなく能動的にかかわることでその場を共有することができる。触発すること、潜在的な創造力を引きだすこと、新しい発見をすることで、潜在的に持っているもの、日ごろ忘れていたものを呼び起こさせてくれる。知識や言葉として理解するのではなく、身体を使って実際にやってみること、そこから得られる経験、体感したことは何にも変えがたい重みを持っている。ワークショップは、そのための仕掛けであり装置なのだと思う。



一緒に絵具を混ぜたり塗ったりしながら、学生と地元の人たちとの生き生きとした交流が生まれる。(2001年3月・徳島)

最近では、こうしたワークショップをはじめ地域住民が広く芸術・文化に親しめる機会をつくる試みも増えてきた。それもさまざまな立場の人たちによって行われている。行政が積極的に推進しているところもあれば、住民が主体的に組織をつくって活動しているところもある。美術館でも美術を親しみやすく鑑賞できる開かれた場づくりのための工夫や教育、普及活動の展開に力を入れ始めている。また、芸術が特別の人たちだけのものではないということ、アーティスト自身が実践し始めたことも注目される。一般大衆から乖離した芸術を、アーティストたちが地域の人々の間に入って共同制作を行ったり、住民を巻き込み試みが世界中の各地で横断的に行われている。立場の異なる住民、アーティスト、大学などの専門家、学生などが互いの価値観を認めあい共同で新たなコミュニティーをつくり出そうとしているのである。

大学も社会により一層開かれた関係を求められるようになった。造形芸術活動を基盤に持つ武蔵美が果たす役割は、今後ますます高まるだろう。専門家としての人材の育成だけでなく、日常的にも芸術と社会の新しいあり方を大学自らがつくり出し寄与していかなければならない。専門家はもちろんさまざまな役割を持ったつなぎ手が重要な役割を担うことは、網走の例からも明らかである。

通信教育には、生涯教育としての意味もある。学生の中には、子どものいる人、孫のいる人もいるだろう。また全国のさまざまな地域の人たちがいる。通信教育で学んだことを、周辺の人たち、子どもたちに還元していくことや地域のコミュニティーづくりに生かしていくことも、新しい生涯教育のあり方ではないだろうか。

*2 とくしま・東方・駿・文・録

徳島県が進めている中山間地域の「とくしま国際文化村構想」の一環として、県、町、地元実行委員会、武蔵野美術大学による、官、民、学一体の事業として1999年にスタートした。地域社会における芸術文化の意味をとらえなおし、社会生活の中に芸術文化を根づかせていくための実践的な活動を目指している。これまで神山町で3回、勝浦町で2回の造形ワークショップを開催してきた。

*3 OZONE+MUSABIデザインワークショップ

新宿リビングデザインセンターOZONEと芸術文化学科の共催で1999年から夏毎年開催している。対象は小中学生で、グラフィック、空間造形、映像などをテーマに芸術文化学科の教員と学生が一体となって実施。企画、広報、DMデザインなどすべてに学生が参加し、アート・マネージメントを実践的に学ぶ。子どもたちには、造形を通して新鮮な驚きや喜びを知ってもらい、造形に対する関心を高める。

*4 絵本学会

絵本の表現の分野により立脚した、絵本学という独自の学問領域の確立を目的に1997年5月に設立された。さまざまな領域からの横断的な共同研究や情報交換のできる場を目指している。研究の成果として絵本学の確立をはかり、新たなアカデミズムの可能性を探求していく一方、絵本と社会、子どもたちの接点を開かれた視点からとらえ活動している。<http://ehongaku.musabi.ac.jp/>